

「アウトリーチが終わる度にみんな泣いてたんです。これほど演奏家自身がエモーショナルになっている音楽祭は珍しいです」。「青い海と森の音楽祭」事務局長の入山功一さんが振り返った。「通常のアウトリーチでも、子どもたちやお年寄りの反応に演奏家は喜ぶし、そこに感動が生まれます。でもこの音楽祭は各回とても濃密だった」同音楽祭の開催が決定してから、業界関係者の間では「青森で本当にやれるのか？」といふ



かしがる声も少なくなかった。プロのオーケストラコンサートの開催実績は全国でもワースト3に入る。しかも、国際性を打ち出す地方の音楽祭が多い中、「青い海と森の音楽祭」はあえて地域密着を重視した。「沖澤のどかさんと隠岐彩夏さんの発する『電波』が強くて、いつの間にかその思いに引き込まれ、みんなが自分事として青森と向き合ってきた。それだけに感慨もひとしおだったと思います」と入山さんは語る。

海外から有名な演奏家を招い

④ 地域と紡いでいく

幸せな時間もう一度



最初のアウトリーチ先である東通中学校に到着した沖澤さん(中央)、隠岐さん(左)を迎える入山事務局長(右)＝6月30日午後、東通村(撮影・秋村有香)



てコンサートを開くと、中央のクラシックファンが足を運ぶ。その演奏を専門家が評論する。それが地方における音楽祭の「定型」だった。「でも、それは一体誰のための音楽祭なのか。そう思う人もいたと思うんです。だから青森の音楽祭を見た人たちは、これが本来の音楽祭の形なんだって気づく」と入山さん。「青森で生まれた音楽祭が全国のスタンダードになるかもしれない」

「津軽弁でマイネ、マイネって言いますよね。ドイツ語でマイネって私のってという意味なんです。最初ドイツ行ったとき、びっくりしました」。アウトリーチで進行役を務めた沖澤さん

の軽快なトークに観衆から笑いが出る。コンサートホールとは違う、同じ目線で音楽を楽しむという雰囲気各会場に満ちていた。「あの幸せな時間をもう一度味わいたい」。アウトリーチ、0歳からのファミリーコンサートなど複数の演奏会に足を運ぶ参加者の姿があった。「音楽を届けるつもりが、逆に受け取ることが多かった」。期間中、沖澤さんをはじめ、アウトリーチのメンバーは繰り返した。

「言葉にならない」。青森市の福祉施設「待望園」でのアウトリーチ終了後、同施設に通所する阿部瑛太さんは長い沈黙の後、ささやいた。「いっつもはおしゃべりなのに」と隣で仲間が笑う。「どんな言葉が合うのか分からない。それくらい感動したんだ」

(加藤桃子) 終わる